



## コミュニケーションの第一歩

-異文化との付き合い方から-



竹中 豊 (たけなか・ゆたか/コミュニケーション文化専攻 教授)

2008年の夏、多民族国家カナダのモントリオールでのこと。ファーストフード店でハンバーガーを注文したとき、対応した女性スタッフは、頭にスカーフを被ったイスラム教徒でした。なじみのない光景に一瞬とまどいましたが、でもこれは「いいな」と思いました。固有の文化的・宗教的慣習が、職場でも他の人たちに支障をきたさない限り、それが尊重されているからです。また、カナダの市民の側でも、それを自然に受け入れています。

こうした文化的共生の在り方を、インターカルチュラルイズムまたはマルチカルチュラルイズムとも言います(もっとも、この両者は微妙に異なるのですが)。ホスト社会のなかに異質な要素が入ってきたとき、わたしたちはどのように対応すべきなのでしょう。モントリオールでの例は、そのよい見本を示しているようです。つまり、むやみに拒否せず、「相手文化を尊重」する姿勢です。「対等の精神」と言ってもよいでしょう。世界は相互に価値の異なるものから成っている、という基本認識です。カリタスでは、こうして異文化との付き合い方も学んでいきます。(写真はモントリオールで)

## 在学生との対話

及川恵理 (専修大学付属北上高校出身)

今回は、コミュニケーション文化専攻に在学中の及川恵理さんに入学動機から学生生活までいろいろと質問してみました。

Q カリタスをどうして知りましたか？

A 高校の先輩から紹介されました。コミュニケーションを学べる短大は珍しいので、インターネットなどで調べるうちに、ますます興味を持ちました。

Q なぜコミュニケーションを専攻？

A 高校の時に吹奏楽部にいたことが大きな理由です。楽器や音楽をとおして、人との交流、つながり、そして調和について考えていたことがきっかけです。

Q カリタスでの勉強はいかがでしたか？

A どの科目も丁寧に指導していただき、また自信ができました。たとえば「コミュニケーション研究」では、プレゼンテーションの仕方が学べました。パソコン機器にも慣れてきました。さらにカリタスのルーツとして、カナダという"異文化圏"にも触れることができました。

Q 卒業後はどうされますか？

A 地元(岩手県)にあるホテルに就職します。地域の活性化と人との触れあいを大切にしていきたいと思っています。

Q 後輩に一言。

A あっという間の2年間ですが、カリタスでの学生生活はとても密度の濃いものでした。一日一日をどうか大切にしてお過ごし下さい。



及川恵理さん

## コミュニケーション文化専攻の 主な動き(2008年度)

2008年

5月:「あーすフェスタかながわ2008」に学生ボランティア参加

スポーツデイでコミュニケーション文化専攻の学生大活躍(総合一位)

6月:読売新聞東京本社編集局国際部の記者長谷川由紀氏をお招きして特別講義(「マス・メディア研究I」)川崎市健康福祉局主催による「川崎市障害者スポーツ

講義中の長谷川記者 大会」に、ボランティアとして参加。

7月:『キャンパス・プレス』紙を発行(「マス・メディア研究I」)



ボランティア参加中の大崎さん(左)

あざみ野のケベック・カリタス修道女会修道院にて、高齢者のための福祉活動に、ボランティアとして参加。

7月~8月:カナダの首都オタワの病院での「国際ボランティア in カナダ」、およびオタワ、モントリオール、キングストンでの「異文化体験プログラム」に参加(計2週間)

10月:『「国際ボランティア in カナダ」報告集』の発行

11月:国際交流フォーラム。「『北米におけるフランス語圏文化-ケベックの魅力-』にマルク・シュヴリエル氏(ケベック大学政治学部教授)をお迎えしての講演とシンポジウム。

12月:本学市民大学講座で河野太郎氏(衆議院議員)の講演「イメージの作られ方

-政治編-」および川平朝清氏(昭和女子大学常任監事)の講演「文化間コミュニケーション-国際結婚の場合-」に特別参加。

クリスマス会

2009年

1月:『「国際ボランティア in カナダ」写真・イラスト集』の発行

ビデオ作品の制作発表(「マス・メディア研究II」)



## 市民大学講座

### カリタス女子短期大学市民講座

市民講座について：

開かれた大学を目指すカリタスでは、市民向けに公開講座を毎年、秋に開いています（全8回・土曜）

2008年度はコミュニケーション文化専攻の企画で、共通テーマは「イメージの作られ方 - ホンモノとニセモノの狭間で - 」。イメージはどのようにつくられてしまうのか、真理を見抜く感性を培うにはどうしたらよいか、歴史像、人物像、社会像、国家像・・・などに焦点をあてながら、その多面的な姿を探りました。



講義中の河野太郎氏

講師としては本学教員以外に、学外からも特別ゲストをお迎えしました。河野太郎氏（衆議院議員）の「イメージの作られ方 - 政治編 - 」、および川平朝清氏（昭和女子大学監事）の「文化間コミュニケーション - 国際結婚の場合 - 」というテーマで、それぞれ興味ある講義をしていただきました。

また、この市民講座は本学学生の自由参加も歓迎しており、毎年、熱心な学生が出席しています。



熱心な受講生たち

### 河野太郎氏の講演に参加して

#### ソー・サンヨン（コミュニケーション文化専攻2年・韓国からの留学生）

講演では、衝撃的なデータを含め、内容がとても興味深かったです。たとえば、私たちは、映画『三丁目の夕日』が舞台となる50年代から70年代をよき時代とし、現代は怖く淋しい時代であると思う人が多いという例がとりあげられました。しかし、実際のところ犯罪率は当時の方がはるかに高く約3倍であるといえます。私は、これは現代の希薄な人間関係に問題があるのかもしれないと思いました。この講座を聞いて帰ってから家で調べてみると、確かに私が小学生だった頃の方が、事件も多く、経済も今のほうがよいことがわかりました。思い込まず真実を調べる習慣をつけたいと思いました。

### 川平朝清(かびら・ちようせい)氏の講演に参加して

#### 中野愛美（コミュニケーション文化専攻2年）

講演の内容は国際結婚における文化間コミュニケーション。講師としてお越し頂いた川平朝清先生自身が国際結婚をしておられ、とても内容の濃いお話で貴重な経験となりました。

まず先入観やイメージによって生じる異文化間のミスコミュニケーションについて、私が共感したことは、川平先生の「～はこうだ!」とイメージをすることで、不幸や偏見が生まれるという考えです。実際に触れ合う前にイメージをつくりあげては、

本来の異文化に触れられないと思います。偏見や差別が生まれるだけだからです。私たちが異文化と接するときに必要なのは、勝手なイメージを作りあげないことだと改めて感じました。

また、触れ合った異文化が、私たちの文化と全く異なるものでも、すぐに偏見の目を持たないことも必要だと思いました。その国の特色・文化・宗教を理解すれば、自らの視野も

広がるはずでしょう。「国際結婚でどうやってうまくやれるか」という受講者からの質問に、この講座と一緒に参加して下さった川平先生のアメリカ人の奥様が、「頑張る・努力・感謝」と答えられ、とても印象的でした。



川平氏と奥様のワンダラーさん



講義中の川平朝清氏

## 「あーすフェスタかながわ 2008」 で学生ボランティア大活躍

神奈川県には、現在160を超える地域の約16万人の外国籍の方々が暮らしています。多様な文化や価値観を持つ人々との共生の実現に向けて、県内の民族団体、NGO、市民ボランティアが企画・実施しています。

本専攻の学生も、ボランティアとして参加し、外国の遊びの紹介やイベントの案内をしま



ネパールの遊びキャロムボードした。

## 学 生から一言

「あーすフェスタ」に参加して

杉本瑞穂

コミュニケーション文化専攻2年



世界の民族衣装

新しい自分とは違う国の遊びを知ること、その国に親しみをもち興味がわきました。外国人の方から、民族衣装を着てみたら、と勧めてもらったり、遊び方を教えていただきながら、ささやかな国際交流を楽しみました。このようなことから、交流の場を大切にしていることがうかがえました。小さい頃から違う文化に触れられるということは、日本の子どもにとっても大きな影響を与えられると思います。



フィリピンのバンブーダンス



## ☺ 「国際ボランティア in カナダ」に参加して

高木珠莉(コミュニケーション文化専攻2年)

### ～貴重な経験から私が感じたこと～

カナダ(オタワ)で私たちのボランティア活動の実習先は二つありました。はじめに活動した病院はSt.Vincent Hospitalで、次はElizabeth Bruyere Health Centerでした。これらの病院は院内がとて広く、窓にはたくさんのペイントがされていて、明るい印象を受けました。

病院では、現地の中高生もボランティア活動に参加していました。多くの生徒が学校教育の一環として活動しているようでしたが、中には自ら進んで参加している生徒もいたようです。しかし、彼らは嫌がる様子を見せず一生懸命に活動していて、私は感心し、

見習うべき精神であると感じました。私たちは、彼らとペアを作り行動を共にしました。異文化共生の進むカナダということもあり、本当にさまざまな民族の学生たちがいました。しかし、皆が本当に楽しそうに、そして力を合わせて活動していました。

病院でのわたしたちの主な活動は、アイスクリーム販売、洗濯物の仕分け、患者さんへの声かけや移動の手伝い、タレントショーなどがありました。私たちに出来ることは小さなことで、患者さんたちに入院生活をも楽しんでもらうための手伝いが中心でした。そのため、大それたことは出来なくても、患者さんや、学生や、ボランティアコーディネーターには、笑顔があふれていました。

これらの活動の中で私は、患者さんからたくさんの笑顔をもらいました。ボランティアとは、こちらから何かをしてあげたり、与えたりするだけでなく、相手からもらうもの、学ぶことがたくさんあると感じました。カナダでの二週間の生活は、驚きや発見の連続で楽しいことがたくさんありました。

しかしその反面、言葉の壁や、慣れない土地での緊張からか、疲れを感じることもありました。そんな私たちにとって、オタワ愛徳修道女会の修道院は、本当に安らぎの空間でした。シスター方も、私たちを自然に受け入れてくれました。ボランティアから帰ると、必ず話しかけに来てくれました。その笑顔に幾度となく安心感を覚えました。わたしも、そばにいる人や大切な人に、安心感を与えられる人間になりたいと、心から思いました。ほんの少しの勇気を出して、このプログラムに参加したことにより、本当にいい経験ができたと感じています。

最後に、今回のプログラムで、たくさんの人々に出会えたこと、新しい仲間ができたことを嬉しく思います。そして、人が一歩前に進むためには、自分自身の強い意志だけでなく、たくさんの方の支えがあってこそ成り立つことを感じることができました。

このチャンスを私に与えてくれた先生方や、両親に深く感謝したいと思います。



患者さんの介護(左が高木さん)



ボランティアの仲間たち



修道院でシスター方と歓談

## 国際交流フォーラム

カナダ・ケベックからゲストをお迎えて

カリタスのルーツはカナダのケベック、2008年はその町が創設されて丁度400周年目。こうした機会に、昨年のフォーラム(11月15日)は、ケベック州政府のご協力もいただき、カナダ・モントリオールからマルク・シュヴリエ



シンポジウム

先生(ケベック大学モントリオール校教授・政治学)を特別ゲストとしてお迎えしました。題して「北米におけるフランス語圏文化 - ケベックの魅力 - 」

英語圏に囲まれながら、ユニークなフランス語圏文化を形成しているケベックの姿に興味深くお話いただきました(通訳つき)。後半はシュヴリエ先生を囲み、留学体験のある本学学生とのパネル・ディスカッションを実施。文化的・言語的アイデンティティの重要性から、ケベックの女性の生き方に到るまで、興味ある文化と話題を知る機会となりました。



講義中のシュヴリエ先生

## 卒業生からのメッセージ

西岡奈緒さん (2008年3月卒業)  
清泉女子大学 地球市民学科3年在学

私は、今発展途上国での国際開発や援助のゼミで勉強しています。



写真右が西岡さん

編入して、新しい友達が増えました。また、様々な関心のある学生と出会い、私の視野が広がった気がします。

でも、カリタスの良さも再認識しました。先生と学生の距離はとても近いと思います。研究室にも気軽に行くことができました。やはり、それだけこじんまりとしたアットホームな雰囲気が、特別なのだと思います。

井上美香さん (2008年3月卒業)  
アフリカのザンビア滞在中

今、ザンビアで、教会や病院などで看護師としてボランティアをしています。現地の方たちは、決して生活が豊かではありませんが、私をとてとても親切に迎え入れてくれ、自宅よんでご馳走をしてくれます。決して豪華な食事ではありませんが、暖かな人間同士の交わりがあります。カリタスの皆さんから集めて贈ってくださった文房具は、現地の子どもたちにとてとても喜ばれました。



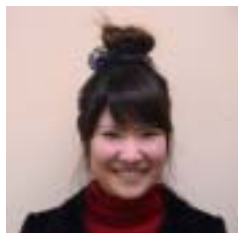
写真中央が井上さん



## コミュニケーション文化専攻の進路状況

### 😊 進学

**フェリス女学院大学 国際交流学部 編入学合格**  
**中澤真央 コミュニケーション文化専攻2年**



編入試験を受けるにあたって私が特に力を入れたことは二つあります。語学と論文です。語学では編入希望者必修の授業である英語特別講座に力を入れました。この授業では編入学試験を突破するための力を身に付けることができます。そして同じ目標を持った同志、夢に向かって頑張る環境が用意されています。はじめは英語圏の学生たちに囲まれたクラスの中で、“コミュニケーション文化専攻だけ英語大丈夫かな”という不安がありました。

英語圏の学生たちのハイレベルな発音の良さには圧倒されましたが、このような質の高い授業環境が私にとって大変良い刺激となりました。そして、このように、常に意識を高くしたまま受験を乗り越えることができたのも、カリタスの少人数の体制が整っているからこそ実現できたものだと思います。語学に対しては“追いつけ、追い越せ”と熱い精神で取り組むことができました。

次に論文。ごちゃごちゃしがちな志望理由をポイント3つに絞り、わかりやすく、かつ伝わりやすく書くよう心掛けました。そして竹中先生に何度も添削をしていただき、最後には自分の意見がより引き立った論文を仕上げることができました。また大学選びに気持ちが揺らいだ際には、何度も研究室へ足を運び、その都度背中を押して下さいました。

カリタスの先生は皆、個々にあった適切なアドバイスを下さいます。その際の一言一言もとても暖かく、くじけそうになった際に何度も勇気づけられました。先生方には大変お世話になり、今でも言葉で伝えきれないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

カリタスの魅力は目標を実現するために集中できる環境が整っていること。ぜひ一度足を運び、暖かなキャンパスの雰囲気を感じて下さい。

### 😊 就職

**㈱横浜銀行内定**

**久保亜理沙 コミュニケーション文化専攻2年**

私は横浜銀行から内定を頂きました。家から都心にアクセスするには、時間がかかる為、「支店がたくさんある企業」を探しました。就職相談室に通い、どのような企業が自分に合っているかを相談し、横浜銀行を受けることにしました。



就職活動中に特に力を入れたことは、エントリーシートの作成です。自分の良い所を限られた字数の中でどのようにアピールするか、それを一生懸命考えました。

そのためには、自己分析、企業研究がとても大切だと感じています。自分の良いところや、どうしてこの企業を志望するのかを明確にしておくことで、面接でも自分をPRできたのだと思います。振り返ってみると、家族、そして毎日のように通った就職相談室の先生方の支えがあったからこそ乗り越えられたのだと思います。

### 進

学先 合格リスト

2009年1月

- ・フェリス女学院大学（国際交流学部）
- ・駒澤大学（経営学部）
- ・中央学院大学（商学部）
- ・東京家政学院大学（人文学部）

### 就

職先 内定リスト（各1名）

2009年1月

- ・㈱横浜銀行
- ・城南信用金庫
- ・川崎信用金庫
- ・㈱オンワード樺山
- ・ヒロセ電機
- ・㈱住友倉庫
- ・羽田旅客サービス㈱
- その他



By 中澤真央

Communic@tion  
jp

発行責任者：竹中豊（コミュニケーション文化専攻） takenaka@caritas.ac.jp  
編集協力：内田香織

カリタス女子短期大学

言語文化学科 コミュニケーション文化専攻  
〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野 2-29-1  
TEL：045-901-5133 FAX：045-901-5066  
URL：http://www.caritas.ac.jp/comm/

